

定例研究会要旨

日時：平成 25 (2013) 年 6 月 26 日 18:45~20:15

会場：東京外国語大学 語学研究所

題目：「ポーランド人日本語学習者の誤用傾向と母語との関連性について
～ヤギェロン大学での教育経験から～」

発表者：森田耕司（東京外国語大学大学院総合国際学研究院准教授 / ポーランド語学）

本発表の主な目的は、2005 年 10 月から 2010 年 2 月までの約 4 年半ほど、発表者がポーランド共和国の旧都クラクフにあるヤギェロン大学(ポーランド語:Uniwersytet Jagielloński / 英語: Jagiellonian University) で日本語教育に従事していた経験をもとに、当時の学生たちの日本語にみられた典型的な誤用例を紹介し、さらに彼らの母語であるポーランド語との関連性について考察を試みることである。

発表者は学生たちの作文やテストの答案から収集した誤用例データをもとに、それらをまず 1 年生から 5 年生まで学年ごとに分類し、そして学年ごとに品詞、テンス・アスペクト、ヴォイス、語順などに関する誤用例を紹介した。

それらの誤用例から、発表者は主に次の二つの傾向が浮かび上がってくることを指摘している。まず、学年にかかわらず誤用の頻度が高いものとして、助詞「は」と「が」、「に」と「で」の混同や接続助詞「て」の誤用、テンス・アスペクトの誤用、次に、学年が上がるにつれて新たに現れるものとして、助詞「と」・「ば」・「たら」・「なら」の混同や助詞「は」と「が」の複文での誤用を挙げている。

さらに、それらの誤用例と学生たちの母語であるポーランド語との関連性については、次のような傾向がみられることも指摘している。

- ① ポーランド語にあるため、日本語でも使ってしまう場合。つまり、ポーランド語からの言語干渉による誤用。例えば、時や場所を表す前置詞による誤用。
- ② ポーランド語に対応するものが日本語に二つ以上あるため、混同して誤用してしまう場合。例えば、「に」と「で」、「です」と「あります」、そ系指示詞とあ系指示詞の混同による誤用。
- ③ ポーランド語の翻訳借用により日本語に導入した結果、日本語として不適切になった場合。例えば、不適切な語彙・表現の使用による誤用。ここで発表者は、学生たちがポーランド語から日本語への翻訳にあたって、白水社の『ポーランド語辞典』（木村彰一・工藤幸雄・吉上昭三・小原雅俊・塚本桂子・石井哲士朗・関口時正 共編）の訳語に頼っていることの問題点も指摘した。
- ④ ポーランド語に対応するものがないため、誤用してしまう場合。例えば、助詞「は」と「が」の誤用。

最後に発表者は今後の課題として、誤用の種類やその傾向についてさらに詳しく分析することやポーランド人日本語学習者の中間言語についての研究の必要性について述べるとともに、ポーランドでは、日本語学習者の年齢層の幅が広く、学習者の数も年々増加していることから、誤用についてさらに詳しく研究することの意義と重要性を強調している。